アルテス　リベラレス（岩手大学人文社会科学部紀要）
第73号　2003年12月　47頁〜58頁

日本語の「無界性」をめぐって

斎　藤　伸　治

1．はじめに

日本語らしさとは何であろうか。音韻や語彙，文法，構文，意味などのある特定の個々の側面だけでなく，日本語全体を通じて流れている一つの方向性とでもいうべきもの。そして，それを母語としないかぎりはなかなか到達できないもの。このような感覚のことをサピアはジーニアスと呼んだ。ジーニアスとは，どの言語にもある「一つの基本的な構図，ある種の裁ち方」であり，「その言語についてあげられるどんな単一の特徴よりも，はるかに根本的で，はるかに行きわたっているもの」とされる（Sapir 1921：127）。またこれは，先天的，直感的なものであり，理屈では説明できない，はじめから刷り込まれたものである（渡部2001参照）。

では，日本語を全体的に特徴づけている一つの方向性，日本語の言語構造全体にわたって繰り返して現れてくる傾向とは何であろうか。もしそういうものがあるとすれば，それは，サピアに従えば，日本語を母語として生まれた日本人にはじめから刷り込まれたある感じ方であり，日本人の思考様式や世界観に対しても強力な影響力をもっていると考えていいであろう。本稿では，既にいろいろなところで論じられてはいるが，日本語の「無界性」への志向性を取り上げ，それと関連させながら日本人のもつ世界観について考察してみたい。

2．日本語らしさと「無界性」志向

日本語の性格を全体的に特徴づけていると思われる基本的要因として，以下，特に池上（2000）などにおいて扱われている日本語の「無界性」（unboundedness）への志向性，つまり経験が言語化される際，一般的に輪郭が不確定な捉え方がなされるという特徴について考えてみたい。具体的にはまず，よく指摘されるように，日本語には正確さをことさらぼかすことを目的とする表現が目立って多いという事実がある。

(1) a. 今までに横町を３つばかり曲がった。（夏目漱石『三四郎』）
　　b. そのかたまりが大きいのと小さいのと合わせて３つほどある。（　同上　）
　　c. お茶でも飲みませんか。
　　d. 一つ間違えば，今ごろは青山の土の下に仰向けになって寝ているところだったなどと思う。（志賀直哉『城の崎にて』）

わずか「３つ」程度の数量にでもわざわざ正確さをぼかした表現を用いるところが，いかにも日本語らしいのである。英語にはこういった種の表現は少なく，（1a–c）の「ばかり」「ほど」

「でも」は英訳する場合，省略されることが多いだろうし，(1d) の「など」も，例えば and so on や etc. と英訳することはできない。英語の and so on や etc. が意味しているものは，それ以外に何があるか尋ねられた場合，具体的に答えられるはずのものでなければならないからである（ピーターセン2001：65)。

日本語が「無界性」志向であるというのは，認知言語学上の術語を用いれば，日本語全体にわたって連続体の（イメージ）スキーマが反映されているということである（池上1989, 2000)。日本語が連続体のスキーマによって方向づけられているのに対して，英語は個体のスキーマによって方向づけられているということになる。日英語の名詞の表現を比較しながら，そのことをみてみよう。日本語の名詞をみると，英語とは異なり，可算名詞と不可算名詞の区別，単数と複数の区別がない。つまり，英語において区別されるような個体（単数可算名詞（例，a book)），個体の集合（複数可算名詞（例，books)），連続体（不可算名詞（例，water)）という捉え方の違いは，日本語の言語表現のレベルでは存在しない。英語では，可算名詞の場合は複数を示す形態素 -s を付加して直接に数量化できるのに対して（例，three books)，不可算名詞の場合は直接的に数量化することは不可能であり，別に数量の単位を明示しなければならない（例，three glasses of water)。一方，日本語では，すべての名詞が直接的に数量化することができず，数を表すためには別に数量の単位（助数詞）を明示しなければならない（例，「3冊の本」「3杯の水」)。これは，日本語の言語表現のレベルにおいては，あらゆる名詞が英語の不可算名詞（つまり連続体）のイメージで扱われているということであり，他から区別されたという意味での個体に対する注目度が英語と比べて低いということを示している（池上1989，今井2000, Lucy 1992参照)。

名詞のレベルにおける日英語間のこのような「無界的」／「有界的」の対立は，もう一方の主要な品詞である動詞のレベルにおいても平行的にみられると池上（1989）は論じている。つまり，意味的にほぼ対応する日英語の動詞の間で行為の成就が含意されるかどうかに関して違いがみられる場合，常に英語の動詞の方が達成を含意するのに対して，日本語の動詞の方はそのような含意は必ずしもなく不明瞭になっているという事実である（したがって，英語の文の *I burned it, but it didn't burn は矛盾文になってしまうが，それに対応する日本語の文「それを燃やしたけれど，燃えなかった」の方は矛盾にはならない（池上 1981))。ここにおいても，意味範囲の中に完結性を含む英語の動詞に対して，完結と未完結に関して不確定な日本語の動詞には連続体のスキーマが反映されているとみることができる。

他にも日本語の基本的な特徴とされているものは，何らかの形でこの連続体スキーマと関わっているものが多いように思われる。例えば，日本語の一つの特徴として擬音語・擬態語の多さということがよく指摘される。そして，日本語では「歩く」という一般的な語に擬音語や擬態語（あるいは他の副詞類）を加えることにより，「よちよち歩く」「よたよた歩く」「とぼとぼ歩く」「ちょこちょこ歩く」「大股で歩く」というようなさまざまな歩き方が表現される。これら一連の行為は，言語表現上，「歩く」を軸として連続的なイメージで処理されているわけである（しかも，このような擬音語・擬態語はほぼ無限に作り出すことさえ可能である)。一方，英語では，これら一連の行為に対して，（歩く行為を表す一般的な語として walk があるが）それぞれ toddle, totter, plod, waddle, stride という全く別々の語が用意されている[1]。英語では，

1) ちなみにアラビア語は，英語よりもさらに個別化の程度が進んでいる（牧野1989参照)。(3)に挙げたような例だけでなく，英語なら通常 walk に副詞類を加えて表すような動作もすべて，アラビア語では一つ一つ別の語によって表される。以下の例は牧野（1989：119）からの引用。
mashā（(一般的な意味で）歩く)，daraja（よちよち歩く)，tahādā（よたよた歩く)，shaḥā（大股で ↗

言語表現上，これら一つ一つの歩く行為が他から区別されて，それぞれが個別化されていると言えるわけである。ここにも日本語と英語の連続体スキーマと個体スキーマの違いが反映されているとみることができると思われる。

そもそも擬音語・擬態語という感性語自体が，輪郭の不確定な，ファジーな性質のものであり，日本語のそのような感性的な語彙の多さ，使用頻度の高さそのものが連続体のスキーマの反映とみることができよう。また，このような感性語ほどではないにしても，荒木（1994）が主張するように，「やまとことば」を中心として，日本語の語彙には輪郭の不確定な性質のものが多いように思われる。特にそれが端的な形で現れるのが，ものの「端」を意味する場合であろう。巻下（1997）は，次のような日本文学からの一節とその英訳とを対照させて，日本語では「端」を指す語が広がりをもっているのに対して，英語では「端」はあくまでも極点にとどまるということを指摘している。

(2) a. 婆さまをなくした爺さまは，いつまでも墓の前で泣いておりました。（川内彩友美『まんが日本昔ばなし』）
　b. The next day, the old man dug a grave for his wife and stood before it weeping.（R. McCarthy による英訳）
(3) a. K と私は何でも話し合える仲でした。（夏目漱石『こころ』）
　b. K and I were close friends, and there was little that we did not feel free to discuss with each other.（E. McClellan による英訳）

(2a) の「いつまでも」は「永久に」の意味ではなく「しばらくの間」ということであり，(3a) の「何でも」も「いろいろなこと」といった程度の意味である（巻下（1997：41-42））。したがって英訳では，訳出されていなかったり，あるいは少なくとも直訳的には対応されていない。このように日本語の場合，「端」を意味する語でも，英語とは異なり，文字どおり極点だけを意味するのではなく広がりをもっているのである。

日本語は省略などが多く，非常に文脈依存性が高い言語である。話し手は必ずしも伝達しようとする情報をすべて言葉表現の中に明示的に提示するわけではなく，聞き手はさまざまな状況や文脈からそれを積極的に補わなければならない。つまり，コミュニケーションがうまくいくかどうかに関して，日本語の言語社会では，聞き手の側に主な責任があるとされる（Hinds 1987）。一方，英語は文脈依存性が低い言語であり，話し手は伝達しようとする情報を言語表現の中に明示的に提示していることを期待され，コミュニケーションの成否に関して，話し手の側に主な責任がある

↘ 歩く），haydaba（急いで歩く），huwaynā（ゆっくり歩く），khaṭara（体を振って元気に歩く），takhallaja（左右にゆれて歩く），tarahwaka（興奮して歩く），sharada（怒って歩く），tabakhtara（いばって歩く）など。
また牧野（1989）は，アラビア語には本来的に合成語が存在しないという事実にも注目している。例えば，日本語でなら「雄牛」「雌牛」「仔牛」「若牛」「野牛」というように「牛」を中心に一連の語が合成されるのに対して，アラビア語では，これらの牛の種類はそれぞれ，thawrun, baqaratun, ʻijlun, shababun, naʻjatun というようにそれぞれ全く異なった語によって表される（牧野1989：115）。そして，このようにそれぞれの事物に全く別の語を対応させていく傾向は，アラビア語の語彙全体にまで及んでいるとのことである。牧野は，事物や動作のそれぞれに対して別々の語が割り当てられるというこのアラビア語の一貫した特徴が，アラブ人の思考様式，つまり現実世界における個体の重視と関連していると述べている。その他，さまざまな重要な側面にみられる二者間の明確な対立関係など，アラビア語は（英語よりもさらに）日本語とは対蹠的な関係にあり，興味深い。

とされる言語社会である。言い方を変えれば，コミュニケーションにおいて，英語は発話の状況や文脈から比較的独立しているのに対して，日本語は状況や文脈からの独立性が非常に弱く，それらと連続した関係にあると言える。また，イザヤ・ベンダサンは『日本人とユダヤ人』の中で，日本語のコミュニケーションにおいて重要なのは，言葉そのものではなく，むしろその言葉を発した態度，語調，礼儀なのだと主張し，次のように述べている（ベンダサン1971：230）。

> 母親が子供に「チャント・オッシャイ」という場合，明晰かつ透明（英語ならクリアー）に言えということではなく，発声・挙止・態度が模範通りであれ，ということである。だが，クリアーということは，原則的にいえば，その人間が頭脳の中で組み立てている言葉のことで，発声や態度，挙止とは全く関係がないのである。

つまり，日本語は，発話される状況や文脈だけでなく，その時の話者の態度などとも緊密な関係にあり，場合によってはそれら非言語的な要素と区別することができない。これも，連続体のスキーマの反映とみることができ，個体のスキーマが反映される英語とは一貫した違いを示しているのである。

最後に，日英語のメタファー表現に，連続体のスキーマと個体のスキーマの違いが反映されているという野村（2002）の研究があるのでみておきたい。Reddy（1979）は，英語においてコミュニケーションが「導管メタファー」(conduit metaphor）と呼ばれるメタファーを用いて概念化されているということを主張した。これは，伝達される内容を「容器」としての言葉に入れ，相手に送ることによってコミュニケーションが行われるという捉え方である。日本語でも英語と同様に，言語コミュニケーションを概念化する際にこの導管メタファーが用いられるが，両言語では用いられるメタファーに若干の違いがある。野村（2002）によれば，英語では，(4)の例にみるように言葉は「容器」という個体として捉えられる傾向が強いのに対して，日本語では，(5)の例にみるように言葉は「液体」という連続体として捉えられる傾向がある。

(4) a. Try to pack more thoughts into fewer words.
　　b. The sentence was filled with emotion.
　　c. I don't get any feelings of anger out of his words.
(5) a. 言葉を漏らす
　　b. 辛らつな言葉を浴びせる
　　c. 暖かい言葉をかける

野村（2002）は，日英語のこのようなメタファーの違いには，両言語間の連続体のスキーマと個体のスキーマの対立がみられるのではないかと述べている。伝達される内容を液体と捉えるメタファーは連続体のスキーマの反映であり，一方それを輪郭の明確な容器と捉えるメタファーは，個体のスキーマの反映とみることができるということである。認知言語学の考え方では，メタファーというのは単に言語表現だけの問題ではなく，その言語共同体の思考様式や世界の見方を直接反映するものとされている（Lakoff and Johnson 1980参照)。そうすると，日本語のこのようなメタファー使用を動機づけていると考えられる「無界性」への志向性が，日本人の世界観にどう対応しているのかということが次に問題になってくるわけであるが，次節以降でこの問題について考察していきたいと思う[2)]。

3．日本人の世界観・自然観との関わり

言語の構造や使用のさまざまな側面に繰り返し現れてその言語を特徴づけている全体的傾向は，その言語の母語話者の思考様式や世界観と何らかの関連性をもっているという考え方が正しいとするならば，2節でみたような日本語の「無界性」への志向性，特に外界の対象に対して輪郭の不確定な捉え方を好むという日本語の傾向は，日本人のどのような世界観・自然観と対応しているのだろうか。もちろん，これまでにも日本人の世界観や思考・行動様式を示す数多くの文化的特徴が論じられており，そのうちの幾つか，例えば日本人独特の心理とされる「甘え」（土居1971）などは，この日本語の「無界性」への志向性と関連づけて議論することが十分に可能であろう。ここでは，特に日本人の自然との関わり方という問題を中心にして，「無界性」志向との対応を考察してみたい。しかしまずその問題に入る前に，英語において個体スキーマが支配的であるという事実が，英米人あるいはヨーロッパ人一般の世界観・自然観とどのように関連し合っているのかについて，少々長くなるが藤沢（1980）を手がかりとして考察しておきたい。

藤沢（1980）は，Whitehead（1925）が「科学的唯物論」（scientific materialism）と呼ぶ17世紀以降ヨーロッパにおいて一貫して存続し保持されてきた世界観を，次のように要約している（藤沢1980：33-34）。

> すなわちそれは，世界の基礎には物質（物）があって，その物質—あるいは物質の構成要素—が瞬間瞬間にさまざまの配置を形づくりながら全空間を通じて拡がっているということ，このことを，世界・自然における究極的な事実とみなして前提するところの世界観であります。そういう物質はそれ自体としては，センスレス，感覚がなく，ヴァリューレス，価値がなく，パーパスレス，目的をもたない。世界・自然の出来事は，そのような性格の物質あるいはその構成要素の，場所的な運動として記述されるべきであるという立場であります。

藤沢は，このような「世界の基礎的なあり方は知覚とは独立別箇のものであり，また価値（善い，悪い）とも無関係であるという，単純だけれども強力なひとつの考え方」（藤沢1980：78）が，古代ギリシアにおけるレウキッポス・デモクリトスの機械論的原子論とアリストテレスの実体と属性のカテゴリーの区別に歴史的かつ原理的に由来するものであることを指摘している。

デモクリトスは，既に，残っているある断片の中で，色，また甘さや辛さなどはノモス（習慣・約束ごと）の上のことにすぎず，真実にはただ原子と空虚があるだけであるということを明確に述べている。そして，さまざまな知覚的そして価値的性質から区別された「物」を世界の究極的な基礎に据えるというこの考え方は，実は，我々の常識的な思考や行動の有効性としっかりと結びついていることを藤沢は指摘する。例えば，目の前に茶色の机があるとすると，見る角度や周りの明るさなどによって机はいろいろと違って見えてくるが，常識的に，机の知覚像が一つ一つ違うからという理由で机そのものが変化したなどとは考えない。知覚像が変化するたびに物それ自体が変化していると考えては収拾がつかなくなり，有効な行動をとれなく

2）斎藤（2001）では，日英語の無生物主語他動詞文の自然さの違いも，動詞レベルでの「無界性」志向と「有界性」志向の対立と大きな関係があるということを論じている。日本語の「無界性」志向を示すその他の興味深い例については，池上（2000）を参照のこと。

なるからである。そしてもちろん，この場合，さまざまに変化する性質や状況よりも，変化を通じて同一である「物」の方を優位にみる見方になるわけである。

また，藤沢は，我々の日常的な言葉の使い方も，このような世界の見方をさらに強化していると指摘する。「この机は茶色である」（主語―述語）という言い方も「茶色の机」（形容詞―名詞）という言い方も，本来的に「茶色」という「性質」だけを「机」という「物」から区別することはできないはずであるが，あたかもそれらが切り離されて，前者が後者に依存して存在するかのような形で構成されている。「物」を表す主語や名詞がまずあり，それに依存した形で「性質」を表す述語や形容詞があるということである。このような主語や名詞に対応するものを「実体」のカテゴリーと呼び，また述語や形容詞に対応するものを「属性」（性質・分量・関係など）のカテゴリーと呼び，アリストテレスは両者を明確に区別した[3]。実体はそれについて語るのに他の何ものにも依存する必要がないが，属性は実体に依存しなければおよそ語ることができない[4]。このようにみてくると，アリストテレスの実体と属性のカテゴリー的な区別は，原子論の基本的主張と自然に重なり合ってくるわけで，そのあたりのことを藤沢（1980：86）は次のように説明する[5][6]。

> 原子の一つ一つは，……いろいろな知覚的性質からまったく独立であるものとして構想されていて，また当然，善い悪いという価値的なものとも無縁であります。他方，実体と属性との区別それ自体を押し進め徹底化すると，……属性としてのさまざまな性質と，その担い手（基体）である実体との剥離となり，実体（基体）そのものはいっさいの性質（価値的な性質も含めて）から独立した，いかなる述語的規定にも染まらない無垢でニュートラルな何ものかである，という見方に行き着きます。

3） アリストテレスは，『カテゴリー論』第4章と『トピカ』第1巻第9章の2箇所において実体を筆頭に10個のカテゴリーを区別しているが，他の箇所（牛田（1991）の調査ではアリストテレスの全著作のうちの73箇所にも及ぶ）では必ずしも10個全部が挙げられているわけではない。重要なのは，カテゴリーが幾つあるかではなく，実体と他のカテゴリー，つまり属性との間の区別であるということである。

4） この実体の優位性については，荻野（2003：223-224）がWittgenstein（1953）の冒頭近くにある有名な「5つの赤いリンゴ」の例を使って興味深い説明をしている。この「5つの赤いリンゴ」の例とは次の通り。
誰かを買い物にやるとして，彼に「赤いリンゴ5つ」と紙に書いて渡す。彼がその紙片を商人のもとへ持っていくと，商人はまず初めに「リンゴ」と書かれた引き出しを開ける。次いで目録の中から「赤」に対応している色の標本を見出す。それから，その商人は基数の数列を「5」という語まで口に出し，それぞれの数を口に出すたびに，標本に相当する色をもったリンゴを1つずつ引き出しから取り出す。
この例において登場している「5つ」「赤い」「リンゴ」という3つの語は，それぞれ全く別種の行動に対応している。大事なことは，この3つの動作は，まず必ず実体を表す「リンゴ」から始まり，次に「赤い」「5つ」という順でなされるのであって，例えば，最初に何でもいいからまず「赤いもの」を5つ並べてみて，「リンゴ」以外の物が混じっていたら別の「赤いもの」と取り替える，というような行動は決してとらないということである。さらに商店も，「八百屋」「果物屋」というように実体を表す名前で呼ばれるが，「赤いもの」だけを取り揃えた商店などというものは存在しない。荻野（2003）は，「物」を表す言葉（実体語）こそが「言葉と実在世界を結ぶ楔」になっていると表現している。

5） ここで藤沢が問題にしている「実体」とは，主語の位置を占めて決して述語とはならない個体としての実体，つまり存在の究極の拠り所となる実体（『カテゴリー論』の第一実体）のことであって，普遍や種類としての実体（『カテゴリー論』の第二実体）は除かれている。このような藤沢の実体の扱い方への批判を含むアリストテレスの実体概念の詳しい検討としては，牛田（1991）第1章を参照のこと。

6） もちろん，藤沢も述べているように，アリストテレスの機能主義的・目的論的自然観自体は，デモクリトスらの原子論的・機械論的自然観とは本来全く相容れないものであって，実際アリストテレスが『動物部分論』第1巻第1章などでデモクリトスの原子論を正面きって攻撃しているということは，指摘しておかなければならない。

さまざまな性質や状況を通じて同一である「物」(原子)，実体が圧倒的な優位性をもつような世界の見方は，我々の日常的な思考や言葉の使い方にも原因があり，それは我々自身の生存と行動の便宜・有効性ということと関連している。しかし，そもそも我々の生理的な感覚機構自体が既にそのような見方をするように仕組まれているということを，藤沢は渡辺（1978）を引用しながら指摘する。個体を個体として認めるということはどうして可能なのか，もっと具体的に言えば，目の網膜に写る光学的な像はただいろいろな強度の色彩の連続的な分布にすぎないのに，そこに花を見たり，人を見たりするのは，どうして可能なのか。これも，ある神経生理学的な現象がその原因としてあり，本来的にはないはずの物体の輪郭が，物体の周辺からくる信号が抑制されることによって，くっきりと現れるような仕掛けになっているということである。

生存と適切な行動にとって，「物」の判別というのは重要な意味をもっており，そのために人間の感覚機構は，その輪郭を浮かび上がらせ，優先的に知覚させるようにしている。そして，さらに言葉や日常的な思考法がその傾向を強化し堅固にし，いわばその後押しをしているという格好になっている。それが歴史上典型的な形で現れたのが，17世紀以降のヨーロッパに現れた世界観・自然観，いわゆる近代自然科学ということになるだろう（藤沢1980：97-98)。

2節でみた英語の個体のスキーマ志向は，この「物」を優位的にみる世界観とうまく対応しているということになるわけである。そして，生存と行動の便宜・有効性にとって「物」の知覚が決定的に重要な意味をもっている限り，我々は自然に「物」を優位的にみるように仕組まれていると言える。ただ，どの程度その傾向が言語によって強化されているか（あるいは逆に働く場合もあるだろうが）は，言語ごとに異なるとみなければならないだろうと思われる。日本語のように連続体のスキーマが支配的な言語の話者は，英語などの話者と比較して，「物」を優位的に捉えるその度合いはやはり低いのではないか。実は，これらのことを実験によって示した興味深い研究がある。

Imai and Gentner（1997）は，日本語を母語とするグループと英語を母語とするグループについてそれぞれ2歳，2歳半，4歳，大人の4つの年齢グループを被験者とし，可算・不可算の区別をもつ英語のような個体のスキーマが支配的な言語とそのような区別をもたない日本語のような連続体スキーマが支配的な言語において，対象の認知に関して何か差が生じるかどうかについての実験を行っている。実験の方法の詳細については省略するが，ある程度複雑な形をもつもの（例えば陶器製のレモン搾り)，ある程度は特定の形を保てるが触れると形が崩れてしまう堅固性のないもの，つまり典型的な物質（例えばニベアクリーム)，形の単純なもの（例えば蠟で作ったソラマメの形のもの）の3種類について，被験者が形と素材のどちらに注目するかということを調べるものである。形に注目するということは，対象を個体として捉えているということであり，逆に素材に注目するということは，対象を連続体として捉えているということを意味する。ここでの関心からみて興味深い実験結果の一つは，複雑な形のものに対しては，日英語どちらの母語話者でも，そしてどの年齢グループでも，つまり2歳の段階で既に形に注目しており，対象に輪郭を認め，個体化する認知プロセスは普遍的なものであるということが分かったこと，それからもう一つは，特に形の単純なものに関して，日本語の母語話者と英語の母語話者との間で有意義な差がみられたということである。つまり，英語の母語話者は形に注目した反応が圧倒的に多かったのに対して，日本語の母語話者は素材に注目した反応が優勢になった。しかも，この反応の違いは，成人に近づくにしたがいさらに顕著なものとなり，二極化したということである。このように，複雑な形のもの，つまり典型的な物体（典型的な個体）と典型的な物質（典型的な連続体）の中間にある形の単純なものについての実験を

みてみると，形と素材のどちらに注目するかの度合いが話者の母語の言語的特徴（名詞の可算・不可算の区別の有無）によって左右されているということが分かるのである。

さて，外界の対象に対して輪郭の不確定な捉え方を好むという日本語の傾向は，日本人のどのような世界観・自然観と対応し合っているのか，という問題に立ち戻らなければならない。ヨーロッパ人は，上でみてきたような「物」（実体）の圧倒的な優位性に基づいた世界観・自然観に立って，近代以降，自然を支配しコントロールしてきたとされる。また，このようなヨーロッパ人の征服すべき自然に対して，日本人の自然観は服従すべき自然であるというような言い方がよくなされる（例えば安藤1986，和辻1979）。最近では，養老孟司氏が日本人の伝統的な自然に対する態度を「手入れ文化」と特徴づけ，次のように述べている（養老2002：124-126）。

> 日本人本来の自然に対する感覚の根本にあるのは「自然との折り合い」です。それは自然を相手として認めているということであります。……自然を相手にしていると，完全に努力・辛抱・根性になってきます。相手がだいたいどういうものか根本的にわからない，だから予定したとおりにはならない。

要するに，「ああすればこうなる」というような単純なものではないというのが日本人の自然の捉え方の基本であり，そうなれば当然，自然は支配するもの，あるいは簡単に支配できるものではなく，「手入れ」を繰り返しながら辛抱強くつき合っていくべきものということになっていく。

ところで，ヨーロッパの「自然支配」という理念を最も明示的に表明したのは，近代自然科学の方法論の祖とされる英国のフランシス・ベーコンである。ベーコンは『ノヴム・オルガヌム』の中で「人間の事物への支配は，ただ技術と知識のうちにある。自然はこれに従うことなくしては，命令されないからである」と述べている。ここで自然に「従う」というのは，要するに実験を通して自然そのものの原理・原因を「知る」ということである。「知る」ことにより，自然を支配し，コントロールすることが可能となる。養老氏の言葉を借りれば，「ああすればこうなる」自然となる。しかし既にみたように日本文化においては，自然はそう簡単には分からない，思うようにはいかないという考えが根底にある。この自然というのは簡単には「知り」得ないというのが日本人の自然理解の基本になっている。これが「モンスーン的風土」によるもの（和辻1979）なのかはともかく，興味深いことに，日本文化においては，対象を簡単に「知り」得るもの，そして定義やコントロールが容易なものと捉えなかったのは自然ばかりではなかったように思われる。そしてこれが，日本人の世界観の大きな特徴をなしているのではないだろうかとも思われるのである。

では，日本人は伝統的に「知る」ということをどのように考えてきたのか。もちろんこれは非常に大きな問題であり，容易に答えられるものではないが，ただ気がつくことは，日本の伝統的な芸道・武道の修行において，師匠は弟子に分かりやすい形で知識を伝授しようとは決してしてこなかったという事実である。むしろ師匠は，何か質問を受けても非常に曖昧な形でしか答えようとはせず，弟子の方はその答を主体的に受け止め，その真意を長い時間をかけて非常に苦労しながら探り出さなければならなかった[7]。そして，これが日本文化における典型的

7） これは直接的には，2節でみた日本語が「聞き手責任」の言語であるという事実，つまりコミュニケーションの成否に関して聞き手側の解釈に対する依存度が高いという事実と関連する。この点に関して，池上（2000：262）を参照のこと。

な知識の伝授のあり方であったと認識されていたように思われるのである。そういった師匠のあり方をよしと認める文化であり，ものを「知る」ということは非常に困難さを伴うのが当たり前であるとする文化。さらに言えば，簡単に分かるということをよしとせず，むしろ分からないことをかえってありがたがる文化だったようにも思われるのである。

柳父（2002）は，日本文化には，秘伝，秘宝，秘仏，秘法など「秘」を好み，それを作り出す文化伝統があったと述べている。そしてこの文化伝統の核心が，世阿弥の『風姿花伝』にある「秘すれば花なり，秘せずば花なるべからず」という言葉の中に現れていると指摘する。つまり，芸術は「秘」するからこそ「花」（美）になるのであって，それを顕わしてしまえば大したことはない，もうそこには美は存在しないということである。この「大事な意味は表現された形の向こう側に隠されている」と考える文化伝統は，有史以来の先進舶来文化の受け取り方の経験によって生みだされてきたものであると柳父（2002）は論じている。「舶来の文物がこの島国に到来した。その用途はよく分からない。しかし，それはとにかく先進文化であって，貴重な立派なものである」（柳父2002：10）というわけである。この説明が正しいかどうかはともかくとして，このような日本文化の特性は，これまでみてきた対象に対して輪郭の不確定な捉え方を好むという日本語の傾向とも，非常によく対応しているように思われる。そのあたりのことを，次節でもう少し詳しく考察してみよう。

4．「関係性」と直接的知覚の重視

対象を不確定な形で表現することを好む日本語と，対象に対して容易に知り得るとは考えず，逆に分からないことをありがたがるという日本人の世界観には，明らかな対応関係がある。そのことに関連して考察しておきたいもう一つの日本語の特徴は，やはり日本語の構造に繰り返して現れてくる「関係性」の重視である。具体的に例をみていこう。

鈴木（1973）によれば，日本語には英語などヨーロッパ諸言語にみられるような形の人称代名詞は存在しない。例えば，英語では原則として自分のことを指すのにIと言い，これはどんな相手に対してであろうが変わらない。一方日本語では，相手や状況などに応じてどんどん変化する。鈴木（1973：148）では年齢40歳の小学校の教師の例が挙げられているが，例えば校長先生に対しては「私」，自分の父親に対しては「ぼく」，妻に対しては「おれ」，隣の子に対しては「おじさん」，息子に対しては「お父さん」，生徒に対しては「先生」，弟に対しては「兄さん」などといった具合である。つまり日本語においては，ヨーロッパ諸言語でいうような人称代名詞という形態的にも機能的にも他と区別された一つのまとまった語類は存在しないということになる。英語のI（また他のヨーロッパ諸語の一人称代名詞）は，相手や周囲の状況とは全く無関係に用いられ，相手を認識するに先立って，まず自己の認識が言語によって行われていると言える。それに対して日本語の場合には，相手や周囲の状況に応じて自己規定が行われ，状況や相手が具体的になるまでは，いわば「座標未決定の開いた不安定の状態」にあることになる。鈴木（1973）は，これを「対象（相手）依存の自己規定」と呼んでいる。

イスラーム学者の井筒俊彦氏が述べている華厳的縁起的世界は，この問題との関連で非常に興味深い。華厳的存在論では（「事事無礙法界」のレベルにおいては），事物には「自性」（本質のこと）はないが，事物と事物の間には区別が存在すると考えている。どうしてそのようなことが可能であるかについて，井筒は次のように説明している（井筒1989：47）。

すべてのものが無「自性」で，それら相互の間には「自性」的差異がないのに，しかもそれらが個々別々であるということは，すべてのものが全体的関連においてのみ存在しているということ。つまり存在は相互関連性そのものなのです。根源的に無「自性」である一切の事物の存在は，相互関連的でしかあり得ない。関連あるいは関係といっても，たんにAとBとの関係というような個物間の関係のことではありません。すべてがすべてと関連し合う，そういう全体的関連性の網が先ずあって，その関係的全体的構造のなかで，はじめてAはAであり，BはBであり，AとBとは個的に関係し合うということが起るのです。

つまり，例えば，「私」は個としては存在しないが，すべてのものとの関係の総和によって決定されているというのである。この華厳的縁起観が，日本語にみられる「対象（相手）依存の自己規定」と考え方において極めて類似したものであることは，興味深い。

「関係性」の重視を示すものとして，日本語の敬語の発達などはその典型的なものであろう。しかし，フランス文学者・哲学者の森有正氏が強調するように（森1982：204），日本語の表現は，敬語表現であるなしにかかわらず，すべて相手との関係を意識したものとならざるを得ず，客観的・中立的な表現は極めて困難である。「これは茶碗だ」という表現は親しい相手以外には使わないだろうし，どんな相手かに応じて「これは茶碗です」「これは茶碗でございます」という具合に，必ず相手を意識した言い方になるのである。それに対して，英語の This is a cup. は，相手や周囲の状況とは全く無関係に用いられる比較的客観的で中立的な表現である。

このような言語表現における「関係性」の重視と対象を不確定な形で表現することを好む特性とは，同じことの両面とみていい。対象を規定している「関係性」の方に優位性をおかれれば，対象それ自体の輪郭が不確定になってくるのは当然であろうと思われる。対象はそれだけで完結するのではなく，他の事物との関係の総和によってはじめて決定されてくるからである。そして，対象を簡単に知り得るもの，定義やコントロールが容易なものと捉えないというのが日本人の世界観であるならば，日本語のあり方とこの世界観との間には明らかな対応関係が認められるのである。

このような日本語の言語表現のレベルのおける「関係性」の重視と「物」の優位性の低さは，結局のところ，日本語が，直接的知覚を重視してそれをそのまま反映させる度合いが英語などよりも高い言語であるという事実によるものと考えることができる。ユング心理学者の河合隼雄氏が上でみた井筒の華厳的縁起的世界に言及しながら述べているように（河合・中沢2003：215-216），「私」という個が存在する以前に，まず周りとの関係性が存在しているというのが我々の直接的な経験なのではないかと思われる。また，3節で，一般的に言語は，直接的知覚をそのまま反映しているのではなく，生存と行動の便宜・有効性のために「物」（実体）を区別し，それを中心に言語表現を組み立てているということをみた。そして「主語—述語」という形式も「形容詞—名詞」という形式も，本来の知覚とは別に，「物」を表す主語や名詞がまずあり，それに依存した形で「性質」を表す述語や形容詞があるという構成になっている。しかし，主語が義務的な英語に対して，日本語には本来的に主語は存在しないという考え方も一方にはあり（金谷2002，三上1972），実際，日常的に用いられる日本語の表現には主語のないものが非常に多いし，その中には単なる主語の省略とは考えにくい例も多い。例えば「おお，寒い！」（英語ならIかItを主語にするところ）といった表現は，主語の省略という考え方では説明できない。荒木（1994）も指摘するように，この場合，話者も周りの環境も一つになって寒いのであり，そのような「主客合体」とでもいうべき直接的知覚を重視した表現なのである。

5．おわりに

本稿では，日本語の「無界性」への志向性という特徴を取り上げ，この特徴が日本語の構造全体に一貫して現れ，日本語そのものの性格を決定しているということを確認した上で，日本人の世界観・思考様式との関係を考察してきた。特に，従来，ヨーロッパ人の征服すべき自然という自然観に対して，日本人の自然観は服従すべき自然であるというような評価が多くなされてきたが，その違いの根底には，自然に限らず，対象を「知る」ということに対する日本人とヨーロッパ人の態度の違いがあるのではないかということをみてきた。日本人は，知的に「知る」ということに対してあまり積極的ではなく，むしろ柳父（2002）のいう「秘」の文化の考え方にみられるように，分からないものに対して崇拝の念をもってきたように思われる。そして，これは，対象を不確定な形で表現することを好み，「関係性」を重視するという日本語の姿にも現れているとおり，事物はそれのみを切り離すことができず，それと関係のある様々な他の事物や状況などもそれを規定しており，したがって「知る」ということには長い時間と大変な努力が伴うべきものである（そして安易で表面的な「知」は歓迎されない）という世界観からきているではないかと思われるのである。

参考文献

安藤貞雄（1986）『英語の論理・日本語の論理　対照言語学的研究』大修館書店.

荒木博之（1994）『日本語が見えると英語も見える　新英語教育論』中公新書.

アリストテレス（1969）『動物部分論』島崎三郎訳『アリストテレス全集８』岩波書店.

アリストテレス（1970）『トピカ』村治能就訳『アリストテレス全集２』岩波書店.

アリストテレス（1971）『カテゴリー論』山本光雄訳『アリストテレス全集１』岩波書店.

ベーコン，フランシス（1978）『ノヴム・オルガヌム（新機関）』桂寿一訳，岩波文庫.

ベンダサン，イザヤ（1971）『日本人とユダヤ人』角川文庫.

土居建郎（1971）『「甘え」の構造』弘文堂.

藤沢令夫（1980）『ギリシア哲学と現代―世界観のありかた―』岩波新書.

Hinds, J. (1987) "Reader versus Writer Responsibility: A New Typology," in U. Conner, and R. B. Kaplan (eds.) *Writings across Languages: Analysis of L2 Text*, 141-142, Reading, MA.

池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学―言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店.

池上嘉彦（1989）「『名詞的』なものと『動詞的』なもの」『言語』18(9): 44-49.

池上嘉彦（2000）『「日本語論」への招待』講談社.

今井むつみ（2000）「サピア・ワーフ仮説再考―思考形成における言語の役割，その相対性と普遍性―」『心理学研究』71(5): 415-433.

Imai, M. and D. Gentner (1997) "A Cross-Linguistic Study of Early Word Meaning: Universal Ontology and Linguistic Influence," *Cognition* 62, 169-200.

井筒俊彦（1989）「事事無礙・理理無礙―存在解体のあと―」『コスモスとアンチコスモス　東洋哲学のために』1-102. 岩波書店.

金谷武洋（2002）『日本語に主語はいらない　百年の誤謬を正す』講談社選書メチエ.

河合隼雄・中沢新一（2003）『仏教が好き！』朝日新聞社.

Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, Chicago.（渡部昇一他訳（1986）『レトリックと人生』大修館書店.）

Lucy, J. (1992) *Grammatical Categories and Cognition: A Case Study of the Linguistic Relativity Hypothesis*, Cambridge.

牧野信也（1979）『アラブ的思考様式』講談社学術文庫.

巻下吉夫（1997）「翻訳にみる発想と論理」巻下吉夫・瀬戸賢一『文化と発想とレトリック』1-91. 研究社.

三上章（1972）『続・現代語法序説　主語廃止論』くろしお出版.
森有正（1982）「言葉・経験・概念」（内田義彦との対談）木下順二編『森有正対話編Ⅱ』191-227. 筑摩書房.
野村益寛（2002）「〈液体〉としての言葉：日本語におけるコミュニケーションのメタファー化をめぐって」大堀壽夫編『認知言語学：カテゴリー化』37-57. 東京大学出版会.
荻野弘之（2003）『哲学の饗宴　ソクラテス・プラトン・アリストテレス』NHK ライブラリー.
ピーターセン，マーク（2001）『英語で発見した日本の文学』光文社.
Reddy, M.（1979）"The Conduit Metaphor: A Case Study of Frame Conflict in Our Language about Language," in A. Ortony（ed.）*Metaphor and Thought*, 284-324, Cambridge.
斎藤伸治（2001）「無生物主語構文について」『アルテス　リベラレス』（岩手大学人文社会科学部紀要）68：83-93.
Sapir, E.（1921）*Language,* New York.（安藤貞雄訳（1998）『言語　ことばの研究序説』岩波文庫.）
鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波新書.
牛田徳子（1991）『アリストテレス哲学の研究―その基礎概念をめぐって―』創文社.
養老孟司（2002）『手入れ文化と日本』白日社.
渡辺慧（1978）『認識とパタン』岩波新書.
渡部昇一（2001）「サピアの『言語』のジーニアス」『渡部昇一小論集成　下巻』559-570. 大修館書店.
和辻哲郎（1979）『風土　人間学的考察』岩波文庫.
Whitehead, A. N.（1925）*Science and the Modern World*, Cambridge.（上田泰治・村上至孝訳（1981）『科学と近代世界』（『ホワイトヘッド著作集　第6巻』）松籟社.）
Wittgenstein, L.（1953）*Philosophical Investigations,* Oxford.（藤本隆志訳（1976）『哲学探究』（『ウィトゲンシュタイン全集8』）大修館書店.）
柳父章（2002）『秘の思想 日本文化のオモテとウラ』法政大学出版.
世阿弥（1978）野上豊一郎・西尾実校訂『風姿花伝』岩波文庫.

（2003年9月19日受理）